広島女学院
同窓会報
花あやめ
Vol.13
2022年2月10日
広島女学院同窓会 発行
〒730-0014
広島市中区上幟町11-32

2021年度
年間聖句

主は人の一歩一歩を定め 御旨にかなう道を備えてくださる。
人は倒れても、打ち捨てられるのではない。主がその手をとらえていてくださる。
詩編37篇 23節～24節

受け継いでいくもの

広島女学院中学高等学校 校長
渡辺 信一

同窓会の皆さま、中学高等学校 校長の渡辺信一です。常に、広島女学院のことを大切に思い、支えてくださり、ありがとうございます。また、本校の生徒は、海外も含め地元広島以外にも多くの者が進学等いたします。その後の就職なども考えるとき、同窓会の皆さまが世界中のどこにも共にいてくださることは、とても心強いことです。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

この2年間は、コロナ感染症対策に追われておりましたが、2学期から徐々に落ち着きを取り戻し、広島女学院の本来の一日の営みができるようになりました。昨年11月には、キリスト教強調週間がもたれ、中高とも3学年がゲーンスホールにそろいました。それは普段であれば当たり前の事ですが、今はこのように戻ってきた一つずつのことに本当に感謝する毎日です。今年度は講師として、ホームレス支援等の活動をされている奥田知志牧師を迎えました。奥田先生は創世記1章31節『神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった。』を主題聖句として、「無くてはならぬものは一人ひとりに与えられているかけがえのない命である。だがその命がすべての人に同じく尊ばれていない」と述べられました。奥田先生との出会いを通して、中学生、高校生そして教職員の一人ひとりが「私たちは、生きていること、そのものに価値がある」ということを感じる事のできる、宝物のような時間を与えられました。

生徒の教育環境は、どんどん進んでいます。例えば、一人1台パソコンを所有するようになりました。情報を得ること、学ぶことができることは、どんどん広がります。より価値のある成長ができる環境がどんどん整いつつある一方で、子どもを商品のように考える世の動きがあるといっても過言ではないでしょう。しかし、広島女学院は「生きていること、そのものに価値がある」と言い切る所です。そのことをこれまで以上に、これからも受け継いでまいります。

ブロック・支部・地区の活動について ー会費納入のお願いー

同窓会会長 竹内 路子

コロナ禍により「全国代表者会議」（総会/毎年4月開催）は、2020年・2021年と対面開催が叶わず、書面決議で実施しました。2年間のブランクを埋めるため、地域や会員数によって運営や活動は異なりますが、各ブロック・支部・地区における「情報伝達手段やコロナ禍での活動、財政状況等」をシェアすることで、同窓会活動の活性化が図られるのではないかと考え、アンケートを実施しました。

設問は①定例会の開催②案内方法③案内先④年会費の徴収方法⑤会報発行⑥役員会⑦財政運営等々についてです。支部長・地区長の多くが「**若い方の参加が少ない**」こと、「**役員人事が困難である**」こと、「**年会費の納入率が低い**」ことを挙げておられました。

また、「卒業時に入会金を支払ったので支部・地区年会費は支払う必要がない」と思っている方も多々おられるのではないか、とのご指摘もありました。

同窓会の会費には①卒業時に同窓会本部に納入する入会金（終身会費=15,000円）と②所属の支部・地区に納入する年会費（支部・地区によって納入時期・方法・金額は異なる）があります。①は母校支援の為の基金として積み立てられ、また会報等をお届けする情報伝達の原資となっています。②は支部・地区の活動（慶事御祝や会報発行、送料etc.）に費やされます。過去の議事録等によれば昭和30年初頭には各支部・地区が毎年会費を徴収し、30%を手元に残し70%を本部に送金するシステムでしたが、昭和32年の総会で基本的積立を安定的にするため終身会費が採択され、卒業時に徴収することが決定。昭和34年の全国支部長会議（総会）において、30%対70%の配分も正式に撤廃され、以後、年会費徴収は支部・地区の裁量となった次第です。

皆様一人ひとりのお支えで、同窓会活動は成り立っています。皆様がお住まいの地域には必ず同窓会支部が在ります。今はコロナ禍で集うことは難しい状況ですが、この困難な時こそ、皆様のなお一層のお力添えをいただきたく、お願い申し上げます。

2022年度年間行事予定

4月22日（金） 4月23日（土）	全国代表者会議 2022年ホームカミングデー
6月1日（水）	同窓会報「花あやめ」14号発行
7月～8月	「小さな祈りの影絵展」への協力
8月6日（土）	広島女学院　平和祈念式
11月3日（祝・木）	同窓会バザー
2023年1月	高校　同窓会受入式
2月10日（金）	同窓会報「花あやめ」15号発行
3月	大学　同窓会受入式

随時　HPに更新していますので、ご確認下さい。

同窓会報「花あやめ」発行月の変更について

2022年度より女学院報の発行回数が年2回（6月1日と2月10日）となるのに伴い、同窓会報「花あやめ」も6月と2月の発行となります。引き続きご愛読くださいますようにお願い致します。

召天　謹んで哀悼の意を表します。

児玉	俊子（梶川）	高6	玉川	雅美	高50
網谷	美佐子（黒河）	高女56	藤澤	敦子（浜中）	高7短6
山田	悦子（豊見）	高13大英13	山本	裕子（山崎）	短23
川口	壽子（渡部）	短2	大中田	智子（島）	高10
吉田	二美恵	高12大英12	免出	叔子（香川）	高女49
土井	美年子（藤井）	短2	渡邉	澄子（脇本）	高16
坂下	節子（水野）	高9	高杉	和子（堅山）	専庭3
岩崎	桂子（野間）	短10	礒田	静子（佐々木）	高11
小西	哲子（熊本）	高5	角中	希美枝（角中）	高13
中村	貴美子（鍋田）	高5	川野	千代子（香川）	高3
岡本	和子（森）	高3短2	松井	みどり（松井）	高5
流田	真里子（宮中）	高25			
小島	征子（西田）	短14			

2021年7月から11月までにご逝去のお知らせをいただいた方々です。（敬称略）

寄付　2021年11月

井戸　南海子様（短12）……5,000円

お詫びと訂正

12号「寄付」に掲載しました
「高橋 和子様（高9大英9）」は
「高橋 知子様」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

編集後記

同窓会本部では、現在、同窓会100周年記念誌の編集作業を進めておりますが、長きにわたり繋いでこられた母校愛と同窓愛のなんと逞しく美しいことでしょう。まさに小倉桂子さんのご寄稿の中の「女って本当にパワフルよね！」を体現するかの様です。

そして昨年ファーストレディになられた岸田裕子さん（高35回）には同窓より共に静かな祈りと愛をそっと送り続けてまいりましょう。困難と不如意にあふれる今こそ、片山芳子さんのおっしゃるように“Difficult? Yes!　Impossible? NO!”と自らに問いかけつつ歩んでゆきたいものですね。今より1㎜でも素敵な世界を実現して未来に手渡すために…

“今”を見つめ、未来のために明るく軽やかに奮闘中の皆さまの言葉に力を頂きました。パワフルなご寄稿の数々に感謝申し上げます。

2020東京オリンピック、パラリンピック競技大会に参加して

片山 芳子さん
（高21文英3）

“主よ　変えられないものを
受け入れる静けさと
変えられるものを変える勇気と
その両者を見分けられる英知を
我に与え給え”
（「ニーバーの祈り」より抜粋）

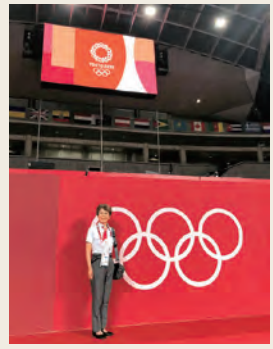
「多様性と調和」をめざした2020東京オリンピック、パラリンピック競技大会 卓球の部に、テクニカルオフィシャル（技術役員）審判長補佐として参加した。仕事の内容は国内技術役員の総括、進行など各部署との調整、全体チェック、世界の六大陸から選出された国際審判員と審判長の補佐を含め、多岐にわたった。全ての試合に立ち会うべき立場であり、朝早くから夜遅くまでの業務だったが、日本卓球オリンピック史上初めての混合ダブルス優勝の瞬間に立ち会えたことは、大きな喜びであった。

今回の大会は、コロナ禍緊急事態宣言下、大会直前まで詳細がわからず、暗中模索手探りの中でのスタートとなった。

安心安全の大会を目指して、毎日のPCR検査、大会2週間前からの健康調査提出、会場内では徹底した消毒実施、トイレ・医務室は選手・役員・ボランティアで別々、移動はバスでのホテル～会場のみで一切外出禁止という厳しいものだった。情報の伝達交換もアプリを使い、審判員もタッチパネルを操り、徹底してペーパーレスを目指した。

オリンピック選手のプレイも素晴らしかったが、パラリンピック選手のプレイには目を見張らせるものがあった。片足のない選手が杖を足のごとく使ってのフットワーク、両腕のない選手がラケットを口にくわえてのスマッシュ、足の長さが違う選手が靴底の高さの違う靴をはいての華麗なラリーの応酬など。2週間共に過ごすと、彼らのどこに不具合があるのだろうかという思いに囚われてしまうほどだった。一人ひとり違った変えられないものを冷静に受け止め、変えられるものは創意工夫し想像を絶する努力をして、この大きな舞台に立っている真の勇者の姿がそこにあった。

テレビに映る選手の活躍は誇らしく、嬉しいものであったが、一方で、その選手たちを支えた名もなき多くの方のご苦労、サポートを肌で感じた。いつも笑顔で迎えてくださったボランティアの皆さん、朝早くから夜遅くまで炎天下でのバスの送迎・警備の方々、会場の入り口でのセキュリティチェック担当の警察・自衛隊・消防局の方々、会場内の消毒・医療班などの皆様には頭が下がる思いだった。新しいこと困難なことにチャレンジ、まして賛否両論ある場合は大きなリスクを伴う。そのリスク（−）を（−）のままで、終わらせず、プラス（＋）に転じさせるものは最悪の場合を想定した「十分な準備」と「人間力」だとオリパラの仕事から学び痛感した。



今回、コロナ禍の真っ暗なトンネルの向こうに、確かな未来への“希望の光”を見つけた。

Difficult?　Yes!
Impossible?　No!!

プロフィール

国際審判員、役員として世界選手権、アジア大会、
女子ワールドカップ等数多くの国際試合に参加。
2021年12月まで、国際卓球連盟 審判・レフリー委員会委員
日本卓球協会 公認レフリー、上級審判員

同窓会新グッズのお知らせ

女学院大学　人間生活学部　生活デザイン学科とのコラボ企画第3弾として、マスクケース兼チケットケースを製作致しました。

小林文香教授のご指導のもと学生たちがデザインした17作品（色別36パターン）から数戸（すどう）れなさん（生活デザイン学科2年）のデザインを採用させて頂き、抗菌処理を施して商品化したものです。デザインのコンセプトは「女学院のおしゃれなイメージを表現。上下の模様は大学の門を、アヤメの花は私たち女学院生で、蕾や葉は先生方や同窓生をイメージしています。女学院のロゴと校章を花や蕾や葉で囲むことで、皆が女学院の一員である、という意味が込められています」とのこと。

まだまだマスクが手放せない日が続きそうです。バッグに一枚、母校あやめのマスクケースはいかがでしょうか。マスクが不要になっても、チケットケースとしてご使用頂けます。

昨年来ご好評頂いております聖句カレンダー「日日のあやめ」。「懐かしい聖句に日々力をもらえます」との嬉しい便りが届いています。日付だけの万年カレンダーですので、ずっとご使用頂け、プレゼントにも最適です。

お詫び　「日日のあやめ」22日の頁に掲載されております「Believe Myself」の作者のお名前に誤りがありましたのでお詫びして訂正いたします。　天谷　理沙（高36）→ 天谷　理彩（高36）

特別寄稿

パワフルな女性たち

小倉 桂子さん
（高8大英8）

2021年9月、アメリカから一通のメールが来た。「コスタリカのホワイト大使が貴女にインタビューをしたいそうです。」2017年国連で核兵器禁止条約に関する交渉が始まった時、議長として任命されたのがホワイト大使である。

「どうしよう、一体何を聞かれるのだろう。条約の内容に関する被爆者のコメントかしら。」焦りと混乱でオロオロしながら、とりあえず条約の前文から読みはじめたが、完全に理解するには時間が足りない！

穏やかな微笑みを浮かべたホワイト大使によるオンラインインタビューは次のように始まった。「国連総会でこの核兵器禁止条約の交渉が始まった時、貴女が感じたのは希望ですか、不安ですか。」「このような大きな交渉に女性が議長になったことを貴女はどう思いましたか。危惧ですか、驚きですか。」

思いがけない質問に、当惑しながらも私はとっさに答えた。「いいえ、心配ではありませんでした。本来女性は平和を推進するためにイニシャティブを取れる力があると信じているからです。女性は本能的に危険を察知し、争いを避け、平和を願う思いが男性より強いのではないでしょうか。」

女性の特性について思いつくままに言葉を続けた。「相手を慈しむ心。陰で支えることを厭わないこと。相手の立場を理解するための想像力。必要なら何度でも繰り返す我慢強さ。」「あ、ちょっと待って、メモを取っていいかしら。録音もしなくてはならないわ」と大使が遮る。

矢継ぎ早に、とっさに出てくるこれらの言葉は一体どこから来たのだろう。「あ、そうだった。子育ての過程で私が日々感じていた母親の特性だったのだ―忍耐、努力、励まし、いたわり、推測、赦し、そして希望―」

パソコンの画面の中で大使と私は互いにうなずき合いながら、核廃絶という大仕事に立ち向うときこそ、この女性のイニシャティブが必要不可欠であると納得したのだった。

4年前、核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）代表のベアトリス・フィンさんを広島にお迎えし、様々な平和イベントが開催された。それらを支えたのは広島の女性リーダー達だった。私も被爆証言を聞いて頂いたが、その後でフィンさんは私をハグし、「平和活動をする時、女って本当にパワフルよね！」と耳元でささやかれた。それにお応えして私は続けた。「そうです。ご存知のサーロー節子さんこそ、パワフル女性の代表です。その節子さんは私たちの大先輩です」と。

2021年6月、東サラエボ大学へのオンラインによる被爆証言

プロフィール

広島平和活動家　平和のためのヒロシマ通訳者グループ代表
1945年8月6日、8歳の時、爆心地から2.4km離れた場所で被爆。1959年、広島女学院大学を卒業。現在、多くの海外からの訪問者や国際会議を支援。（公財）広島平和文化センターの正式な被爆体験証言者として海外からの訪問者のために自身の被爆体験を英語で語っている。2013年、（財）ヒロシマ・ピース・センターの第25回谷本清平和賞を受賞。

2022年 ホームカミングデーのお知らせ

テーマ 集える喜び

日時　2022年4月23日（土）　10:30～13:30
場所　リーガロイヤルホテル広島
会費　10,000円

2022年ホームカミングデー 実行委員会当番学年

高校21	短大20	文英3	文日3
高校31	短大30	文英13	文日13
高校43	短大42	文英25	文日25

前号で会費8,000円とお知らせしておりましたが、諸般の事情により10,000円とさせて頂きます。

同窓会幹事ミニバザー

コロナ禍により中高文化祭が学内開催となったため同窓会バザーは今年も幹事のみのミニバザーとして開催しました。寄贈品、手作り品、果物、鉢植えの花、キッシュ、クッキーなど取り揃え、万全の感染対策を講じて中高の教職員の方にもご来館頂き、ひとときの楽しい時間を過ごしました。収益金は平和祈念式の運営費並びに本部活動費に充当させて頂きます。

おめでとうございます

四国ブロック長の田中チカ子さん（元 松山東雲短期大学教授）が、令和3年度愛媛県功労賞を受賞されました。社会福祉分野の教育を通して、地域の人材育成に尽力され、長きにわたり男女共同参画社会の実現に貢献されたことによるものです。心よりお祝い申し上げます。

Letters from 同窓生

乳がん教育は未来への投資

広島大学乳腺外科医師
恵美 純子（えみ あきこ）さん
（高45）

数年前に中学校入試説明会で卒業生として女学院の魅力をアピールする役目を仰せつかり改めて母校での日々を思い返した。8歳から合唱団に所属し歌うことが大好きな私にとっては、讃美歌を歌い一日が始まる環境がとても心地よかったし、パイプオルガンやピアノの音色を贅沢に浴びる日々がとても好きだったのだと思う。

私は卒業後、広島大学医学部に進学し現在は乳腺外科医として乳がん診療に携わっている。中学3年生時に幼馴染が亡くなったことがきっかけで医師を志した。歌には少なからず自信があり、歌い続けたいという淡い夢も持っていたが、讃美歌コンクールで共に闘ったある同級生の美声と声量を体感した時に「この人にはどうしたって敵わない」と悟り、歌の道はあっさりと諦め勉学に集中することができた。その同級生は東京芸術大学に進学し、後に国際蝶々夫人コンクールで優勝するほどの逸材であった。今の自分があるのは間違いなくあの時の彼女のおかげであり本当に感謝している。

私が日々診療に携わっている乳がんは、9人に1人が経験するかもしれない女性では最も多いがんであるが、早期で見つかれば90%以上の方が完治を目指せる。早期発見が望まれるが、広島県を含めがん検診受診率は残念ながら低い。「乳がんや乳房に関する正しい知識を身につけて検診を受けてほしい」と街中で呼びかけても、自分のことを健康だと思っている人は耳を傾けない。「では、こちらから出かけていこう」と2016年から高校生を中心に『乳房と乳がんのお話』出張講義を始めた。聴講してくれた高校生が正しく“がん予防”や“ブレストアウェアネス”を実践することで20年後の未来を変えるだけでなく、アンケートの宿題として周囲の母親や祖母などに「乳がん検診を受けているか?」と訊ねてもらい、配布する授業冊子の情報も共有することで、今まさに検診や乳がんを気にしてほしい世代への啓発も期待される。

乳がんは40代から60代で発症がピークであり、闘病は家庭や仕事で忙しい女性の生活を直撃する。近年進められている『がん教育』には、日本人の2人に1人が経験する“がん”という病気に関する正しい知識を身につけ対処する力を持つだけでなく、病気によって降りかかる様々な困難についても正しく理解し、「困難な時にはお互いに支えあって豊かに生きていく」ことを“がん”というものを通して考え学んでいく大きな目的がある。未だ、育児も家事も介護も“女性がするもの”という慣習が根強く残る日本で、女性の誰もが憂いなく活躍することはまだまだ困難であると言わざるを得ない。

社会や人の考え方、行動は容易には変わらない。大変な時はみんなで頑張ればいいじゃないか！教育とは壮大な未来への投資である。

プロフィール

1999年　広島大学医学部医学科卒業
同年5月　広島大学原医研腫瘍外科　入局
2006年3月　大学院卒業、医学博士号取得
以後、広島大学乳腺外科にて乳腺診療に携わり、3人の育児の傍ら遺伝性乳がんの診療、乳がん教育の推進に従事。広島乳腺女性医師の会会長として広島の女性外科医のスキルアップとロールモデルの構築を目指す。

乳がんを知ることは、あなたを愛することだから

乳がん患者友の会きらら 代表
中川 圭さん
（文日11）

私は乳がんの患者会「きらら」と全がん種を対象にした「広島がんサポート」という2つのNPOを立ち上げ、運営しています。こうした活動を始めたのは、自身が患者となった時に、科学的根拠に基づいた情報がいかに重要であるか、また同じ病気の体験者の存在にどれほど勇気づけられるかを、身をもって体験したからです。「きらら」は有志の患者が乳がん患者とその家族のために立ち上げた自助グループで、前向きに乳がんと闘うことを目標におき、広島県内のがん患者支援団体としては唯一の「認定NPO法人」です。毎月、学習会やおしゃべり会を実施し、年に一度の500人規模の「乳がんフォーラム」を過去23回継続開催し、乳がんに関する情報提供やピア活動を行っています。相談に来られた患者さんやご家族が、明るい顔になってお帰りになる姿を見る時が一番嬉しい時で、この活動を継続していく大きな意義を感じます。

また、「きらら」はピンクリボン活動などの乳がん啓発活動にも力を入れています。乳がんは怖い病気です。しかし、早く見つけて適切な治療を受ければ、決して怖くない病気です。一番怖いのは、乳がんのことを知らず、自分の身体に注意を払わないことです。「自分は大丈夫」と思わずに、早期発見のために乳がん検診を受診しましょう。

昨年のピンクリボン月間の10月には「きらら」が事務局となり、全国5都市でライトアップイベント「ピンクリボンde上を向いて！」を開催しました。広島では、初めて広島城をピンクにライトアップし、広島西飛行場跡地でシークレット花火を打ち上げ、ピンクの光とともに、乳がんにもコロナにも負けない勇気を、患者さんをはじめとした市民のみなさんにお届けしました。これからも多くの方々のお力をいただきながら、患者さんの心に寄り添う活動をしっかりと続けてまいります。

プロフィール

認定NPO法人乳がん患者友の会きらら理事長
NPO法人広島がんサポート副理事長
2000年夏、42歳の時に乳がんと診断され、その後、他臓器へ転移。現在も再発治療を続けながら、患者支援活動や乳がん啓発活動を継続中。

リレーエッセイ

駆け出し大学教師

元 広島女学院大学 助教授
広島大学 名誉教授
原野 昇 先生

縁あって広島女学院大学の教壇に立たせていただいた。1971（昭和46）年4月から1976（昭和51）年3月までの5年間である。自身は満28歳から33歳までで、初めての教師生活であった。担当は文学部（日文と英文）の「言語学概論」1コマと「フランス語」5コマである。

右を見ても左を見ても若き女子学生ばかりの中で、若き男性教員として緊張もし、それだけに授業に必死に取り組んだように思う。一生懸命フランス語を習得してもらおうと思う余り、授業は厳しかった。私語は即刻退室。これだけ熱心に教えているのだから、試験でもみんなある程度の合格点は取れるはずと、採点も厳しかった。欠点（10段階評価の5点以下）をつけた学生数も多かった。当時、厳しい先生の筆頭は英文科学生必修の英語担当の先生で、「鬼のK」と呼ばれていたが、筆者はそれに並んで「鬼の原野」と呼ばれた。

着任1・2年後の大学祭のある日、文学館の教室を会場に文系クラブ・同好会の展示が行われていた。そこに、フランス語の欠点を前期も後期もつけていた日文の学生が入って来た。見ると彼女は腰の曲がった年配の男性を伴っていた。彼女の祖父であった。「フランス語の先生よ」と言って紹介してくれた。おじいさんは開口一番「若いのう」。

それまで、フランス語の習熟度が他の学生より少し遅れている、何とか少しでも多く習得してもらわなければならない学生として、授業の対象者としての側面のみしか見ていなかった。しかしその日、彼女の家庭のことを思った。「あしたうちの大学で大学祭があるんじゃが、おじいちゃん見に来てくれる?」というような会話があったかも知れない。

その日以来、学生を見る目が変わった。一人ひとりを血の通った人間として見るようになった。

先ごろ卒業後40余年の1人（同窓会役員）に出会った。彼女曰く「私は欠点をもらったけど、フランス語の授業は楽しかった。」

祈望（きぼう）のつながり

共通教育部門 宗教委員　前田 美和子 先生

大学の必修科目「キリスト教学入門Ⅰ・Ⅱ」で私が担当しているクラスでは、毎時間、必ずお祈りから始めています。お祈りの内容については、前の週に受講生が書いてくれ、その祈りに皆で心をあわせています。

私が着任して間もない頃、とある会でお二人の同窓生の方と同席させていただく機会がありました。「あなたは女学院の先生なの?」とにこやかに声をかけてくださったお二人からは、かつての女学院の貴重なお話もうかがいましたが、印象深く、忘れることができないのは、「卒業してからもね、毎日ずっと、女学院のことを祈っているのよ」と言われたことです。本学に流れるあたたかなつながりに大変感激しましたし、私自身、見ず知らずの広島の地に来て不安の中にありましたが、祈られていることを知って大きな安心感と力を与えられました。

翌週の授業時にその出会いを話すと、学生たちからは「私たちも先輩方のためにお祈りしたいです」という声が寄せられ、このことを発端に、毎週のお祈りでは、必ずこの女学院の歴史を築き、紡いできてくださった先輩方のことを祈るようになりました。

コロナ禍になって、もうすぐ3度目の春がやってきます。今はまだ、春を感じることはできませんが、きっと大地や草木は、まだ見ぬ、しかし確かにくる春のために新芽をだそうと歩みを止めずに頑張っている頃でしょう。コロナ禍も収束の光は見えませんが、必ずその日が来ることを信じています。

神様が皆さまの日々の歩みや生活を、ひいては人生を、守り支えてくださることを学生たちと祈っています。